令和２年度 つたえる、感じる、つながる、森林×ＳＤＧｓプロジェクト事業
森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会（第 2 回）議事概要

1. **開催日時：**令和 2（2020）年 12 月 3 日（金）10：00～12：00

2. **場所：**Zoom

3. **出席者：** ※敬称略、委員五十音順

＜委員＞
・天笠　茂　　千葉大学特任教授 中央教育審議会副会長
・指出 一正　　「ソトコト」編集長
・島田 由香　　ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役人事総務本部長
・竹内 延彦　　長野県池田町教育長 森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク副代表
・宮林 茂幸（座長）東京農業大学地域環境科学部 地域創成科学科教授
　　美しい森林づくり全国推進会議 事務局長
・山下　宏　　文京都教育大学教授 元森林 ESD 研究会座長
・吉弘 拓生　　内閣官房地域活性化伝道師 総務省地域力創造アドバイザー

＜オブサーバー＞
・榎木 奨悟　　文部科学省総合教育政策局地域学習推進課 地域学校協働活動推進室 室長補佐

＜林野庁・事務局＞
・木下　仁　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長
・藤岡 義生　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 課長補佐
・根岸 由佳　　林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 森林環境教育推進官
・福長 絢一郎　林野庁林政部企画課 課長補佐
・萬宮 千代　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・田中 博幸　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・川元 美歌　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
・野口　翠　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・橋本 卓道　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・梅永 優衣　　（株）かいはつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
・小野 なぎさ　一般社団法人 森と未来 代表理事
・マンジョット ベディ　Just on time CEO

4.　議題：

（1）開　会

林野庁挨拶

（2）議　事

1）森林教育イノベーション調査の進捗報告、方向性

2）モニターツアー進捗報告

3）未来予想図ワークショップ進捗報告

4）報告書構成案

5. 概要：

（1）林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 木下室長による挨拶。

（2）事務局より森林教育イノベーション調査の進捗報告、方向性について説明を行い、質疑応答、討論を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　「森林体験教育」と「森林環境教育」の使い分けについて、「森林体験教育」として整理したという話があった。体験型のプログラムが進められてきており、それらを「森林環境教育」と呼ぶと、「体験教育」との関係性が見えにくくなる。「森林環境教育」が基本であり、「森林体験教育」をイノベーションすることによって、ESD（Education for Sustainable Development)や環境を考えたり、環境に資する取り組みをする人材を育成する新しい教育論がでてくる。その一つの手法として「体験」があると整理する。「森林体験教育」の事例を取り上げ、「森林環境教育」への一つのステップとして考えているという整理をしたら良いのではないか。現場では「教育」という言葉を使っていても、我々としては「森林体験」として整理をし、イノベーションとしての方向性を考える際に、森林環境との関わり、暮らしとの関わりなど連携を明確にし、「新たな森林体験教育による森林環境教育への方向」というようにまとめると良い。（宮林座長）

・　林野庁としては、森林内での様々な体験活動を通じて、森と人々の生活や環境との関係について理解と関係を深めることが「森林環境教育」と定義している。あくまでも、調査上は「体験」に着目して調査したという理解である。（木下室長）

・　「森林環境教育」を「森林環境について考えること」と定義しているが、「森林環境について考え、判断し、行動すること」が「森林環境教育」である。「森林体験教育」が、「森林環境教育」の入口であるという考え方自体は良いが、「森林体験教育」という言葉を前面に出して「森林環境教育」のイノベーションというのは、無理があるのではないか。「森林環境教育」における体験の重要性というのは変わらない。問題は、「体験」偏重、「体験」至上主義のような

「体験さえすれば良い」という考え方であり、森林体験を、持続可能な社会を構築するための知識、力の醸成に、結びつけていくことが重要である。
「森林環境教育」を更に充実、或いはイノベーションしていくための入口としての「森林体験」ということであれば、「森林体験教育」の「教育」という言葉は不要ではないか。ただし、単に「森林体験」というと今までと変わらないため、「新たな森林体験」や「新たな体験主義」などの言葉を用いることで、今までよりもレベルアップした体験に向かうことを打ち出せれば良い。また、現状の教育の中で、新しい取組が出てきているので、強調してご紹介いただきたい。（山下委員）

・ 「教育」という言葉がつく、つかないでニュアンスが違うと感じた。メインは「森林環境教育」であり、これをより効果的にしていくためには、森林を実際に体験することが重要である。「森林体験」とする方が、インパクトが強い。また、調査結果の内容に、「部活や勉強で忙しい」「焚火をしてもゲームのことを話す」という課題があったが、そういう現状を変えるために、教育に力を入れるのだと思料する。一人でも気づく人が増え、気づいた人が周囲に影響を与えることで、このプロジェクトを通じて確実な変化を起こすために、こういった調査は大事である。議論だけでなく、より深いところで関わらせていただきたい。（島田委員）

・ 現状を超えるための、新しいコンセプトの方向性が出し切れていないような印象を受ける。現状の分析で、何が課題なのか狭めきれていないのではないか。調査対象に色々な立場の方がいるのは理解するが、教育課程、学校行事の在り方についての現状の批判については、納得しがたい部分もある。例えば、林間学校は、単発の行事だという指摘があったが、森林を活用した活動というのは、学校の中でも展開してきた。充分でないというのであれば、その立場の方々に対しての、説得的な現状分析がないと届かない。教育課程上、森林体験の枠が取れないという指摘があるが、学校側が取ろうとすれば取れるわけで、手続きを踏んで枠を取ろうという意思があるかどうかがポイントである。新しい在り方を提起する場合には、そのあたりについての指摘、現状批判の精度を高めていく必要がある。既存の学校による森林に関わる教育の在り方、教育課程上の森林体験の在り方などが物足りないのであれば、現場の先生とのやり取りの中で詰めていくというのも、新しい方向性を出していく上で、或いは、より説得性を持たせるために重要なのではないか。また、デジタル化、ICT 環境への融合について、プロジェクトとしてどういうスタンスをとるのかテーマに加えていただけると良い。（天笠委員）

・ まずは、この報告、ビジョンが何をもたらすのかを考えるべきではないか。森林教育を受けた子供が、世界に通用したり、世界をまっとうな方向に持っていったりできる若者に育つことが、ゴールだと考える。「イノベーション」という言葉を使うのであれば、森に関わることによって、イノベーターが育つことが大事なのではないか。例えば、万博を開催することで、万博チルドレンが世界にイノベーションを起こすように、今回の検討委員会で提示したもの

が、これからの社会のビジョンとして、森に関わることで、社会を作れる大人が育つためのものであるということを、大きく伝えた方が良い。また、「体験」という言葉は、非常にニッチな言葉になってきており、「体験すれば良い」という考え方が含まれている。「関与」「関係」という言葉も、どこかの文言の中に、体験の先の言葉として使った方が良い。（指出委員）

・　「森林体験教育」の言葉の定義について、「教育」という言葉をつけると、その主体は提供する側にあると思うので、主体によって「教育」をつけるかつけないか明確に整理すれば良いのではないか。森林体験、自然体験においては多くのチャンネルがあるので、教育の枠に留まらない様々な地域の繋がりなど、様々なチャンネルがあることを共有した上で、今後の展開を考えていくことが必要である。（竹内委員）

・　第一回の検討委員会においても、この事業の目的についての話の中で、「森林環境教育」を更に普及し、私たちの暮らしの中に根付かせていくためには、色々な形を変えてアプローチをするという話があった。調査の中で出てきていることは、これまでも同じことを言われてきているので、深堀をしたうえで、＋αの部分を加え、深化させる視点をいれていただきたい。（吉弘委員）

（３）事務局から、森林モニターツアーについて進捗報告を行い、質疑応答、討論を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　2日間モニターツアーに参加し、東京都にこんなにも豊かな森があるのだということを、東京の方に知らせたいと強く感じた。森に入って少し歩くだけでも、脳の動き、ひいてはパフォーマンスに繋がってくるということは脳科学でも示されており、自身も体験の大切を痛感した。一方で、保護者（≒企業人）が、子供と一緒に森を体験する環境をどうつくっていくか考えた時に、森林空間まで向かう電車内でどう過ごすのかという課題は、ワーケーションの観点から重要である。また、何故山でもなく海でもなく、森なのかということを考えたときに、「水」がキーワードだと感じた。森があるから水がある。森が悪くなると、水が落ちてくる里が悪くなる。里が悪くなれば農業は出来なくなる。ひいては海に出ていき、水産業・漁業もできなくなる。全部の発端は森にあると感じた。森の良さは、多様性を感じられたり、普段と違う音を聞いたり、寒さを感じたりすることで感覚が刺激されること。そういう体験を含めて、大人が何もしない時間を持つということは重要である。大切なのはモニターツアーを実施して終わりではなく、参加者も参加して終わりではなく、どう次に繋げるかということなので、積極的に関わっていきたい。（島田委員）

・　２つのモニターツアーについて話を聞いた時に、里山文化に近いものを感じた。新しい生活様式の中で暮らしながら、コミュニティをつくる。そこにもプロがいて、知恵を教わることが出来る。都市部から少し移動すれば、ワーケーションの空間、エデュケーションの空間と

同時に、新しいライフスタイルが見えてくる。それが森なんだという位置づけが見えた。（宮林座長）

・　特に東京の人が、新しい接点や、接触する人が増えるのは素晴らしい。森を通じて北杜市と奥多摩町という二つの町の地域性に興味を持った方の感想があれば、明記したほうが良い。また、奥多摩の森がもたらす多摩川の流域環境と親水空間というのは、特に東京都民にとってとても重要なので、加えると良い。（指出委員）

・　自然体験、自然環境体験に、「地域性」というキーワードを常に掛け合わせることが重要である。地域によって自然は異なるため、地域を知る、地域を発見するという意味合いも常について回ってくる。地域性というキーワードを常にセットで、パッケージ等を考える際にも入れていただきたい。（竹内委員）

・　日本国内には 1700 を超える自治体があり、色々な地域それぞれにいいものがある。地域性を文言として入れていくことは重要であり、そこに議論のヒントがあるのではないか。（吉弘委員）

・　良いところだけでなく、今の日本の森林の現状を見て、何故そうなっているのか考えたり、或いはどうしたら森林を維持できるのか考えたりする機会もあると良い。（山下委員）

・　プロフェッショナルによる森林教育プログラムに関する視点、ノウハウ、知見を抽出し、プロジェクトの中で明示していただきたい。（天笠委員）

（以下、Zoom チャットへのコメント）

・　森林の「地域性」は文言として大切である。（指出委員）

・　地域によって森林の特性が異なるため、リーダーシップ開発の点でも、目的とする効果から季節と森を選んで実施している。（島田委員）

（４）事務局から、「2050 年の未来予想図」ワークショップについて進捗報告を行い、質疑応答、討論を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　このような取組を継続すると、ワークショップに参加した子供の中から、日本の森林チルドレンのような、社会を変えていく人材が出てくるのではないか。その種まきとして非常に有効だと考える。敢えて加えるなら、同世代の中学生・高校生と自発的にワークショップを実施する等、横展開するために、生徒自身がプロジェクトを展開出来る仕組みづくりがあると

良い。（指出委員）

・　このような取組を積み重ねることにより、次の世代の暮らしの中に「森」という選択肢が出来ると思う。是非、根付かせるための取組をやっていただきたい。（吉弘委員）

・　実際に、学校のカリキュラムの中で実施できるようにするには、都市、山村の学校など、それぞれに向けたいくつかのパターンを作ると良い。森林に関連する事項は、理科や社会など教科の中でも扱われている。このワークショップを総合的な学習の時間に実施するのであれば、理科や社会の教科で学んだ知識を確認するプロセスを加えることで、学校側も取り入れやすくなるのではないか。2050 年という将来を考える視点は非常に重要である。2050 年はカーボンニュートラルな社会なので、その状況下でどうするのかという視点が入ってくると面白い。（山下委員）

・　発展形として、学校のカリキュラム、教育課程に結びつけるための道を探り出す、或いは、学校教育関係者とのコミュニケーションが繋がっていくという動きがあると良い。新しい教育課程は「社会に開かれた教育課程」という旗を立てており、学校の外にある様々なノウハウ、様々な機関との繋がり、取組を支えにしながら学校の教育活動を充実させることを目指している。学校の現状分析や、課題分析を丁寧にしていくと、その道がいくつか見えてくるのではないか。その意味で、これからの方向性を示す貴重な発表である。（天笠委員）

・　ワークショップに参加した子どもが、参加していない隣のクラス、他の学年、隣の学校、学区などの子どもに、こんな体験だったというのを伝えていく仕組みがあると良い。子どもが森に入って行くと段々変わっていくという発表があったが、多くの大人がその様子を目にすることも大事である。また、森という漢字は、木が三つで成り立っており、三人以上で構成される組織との共通点がある。今後、人間同士の関係性に森を掛けていくときに、学べるものは大きいのではないか。DX（デジタルトランスフォーメーション）との融合という観点からも、色々なことが出来るのでは。（島田委員）

（以下、Zoom チャットへのコメント）

・　「教育的プログラム」として提供されると、環境問題の解決といった視点が強くなり、自然環境の保護や保全というメッセージだけが印象付けられてしまう。子どもたちが頭だけで理解して終わったり、他人事になってしまったりしないために、今回のプロジェクトの大前提として、「森は楽しいもの」であり、「自然を楽しもう」というメッセージをしっかり伝えていくことが大切だと考える。究極的には、「人間が幸せに生きるために自然環境は大切なんだ」という理解が次世代の子どもたちに丁寧に共感されるといいのではないか。そのような目的があってこそ、自然環境、森林環境を理解して保全することが必要なのだというストーリーが広がると良い。（竹内委員）

・　竹内委員に賛同する。森は幸せの起源であってほしい。（指出委員）

（４）事務局から報告書構成案について説明。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

・　「森林環境教育」と森林体験の関係について整理する必要がある。事業別の問題点、課題ではなく、「森林環境教育」に向かった現状における課題として整理したほうが良いのでは。（宮林座長）

・　小・中・高の学齢期の子どもが森林から離れるという指摘があったので、この時期の子どもへの対応が、イノベーションの一番大きな課題になっているのではないか。今後の方向性の中に、是非入れてほしい。（山下委員）

・　これまでの取組と限界を超えていくのが、この取組であり、現場から提起されている事項をよりはっきりさせることが、本プロジェクトの提起に繋がってくる。（天笠委員）

・　本プロジェクト実施後、具体的なプロポーザル、コミットメントを出せると、検討委員会が持たれた価値が明確になるのでは。（島田委員）

・　林野庁の事業なので、政策に乗せていただくことを期待したい。（宮林座長）

・　どのように政策に反映させるかという点も、書ける範囲で書いていただきたい。（竹内委員）

・　政策に反映し、形にしていただきたい。（吉弘委員）

・　政策に反映していただけると、とてもいいのではないか。（指出委員）

（５）事務局から今後のスケジュール、最終報告会内容等（案）について説明。

以上